

1. 研究領域名：セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究

2. 研究期間：平成17年度～平成21年度

3. 領域代表者：大沼 克彦（国土館大学・イラク古代文化研究所・教授）

#### 4. 領域代表者からの報告

##### (1) 研究領域の目的及び意義

研究領域の目的：セム系アモリ人の原郷とされるユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査をおこなう本研究領域は、自然、人文両科学の多彩な分野の融合的な連携により、同地における定住社会出現の中で部族社会が形成された経緯を解明する。この目的に到達するため、本研究領域は現地研究と国内・外関連研究の2つで推進される。現地研究は、遺跡分布調査（遺跡の分布状況と遺跡毎の年代の解明、発掘対象遺跡の選定）選定された遺跡の発掘調査と周辺地域の関連調査 4年間の調査成果を踏まえた総括的・補足的現地調査（最終年度）と進行する。国内・外関連研究は、関連資料の実見・分析、文献資料の収集・整理・解読・データベース化などである。

研究領域の意義：邦人調査団が1956年以来西アジア地方でおこなってきた考古学研究は、客観的な研究手法により、世界的に高い評価を受けてきた。しかし、これらの研究が多彩な研究分野の連携による総合的研究であったとは言い難い。そこで、邦人調査団が西アジア地方で蓄積してきた個別研究成果を踏まえつつもそれらにとらわれず、複数研究分野が融合的に連携する総合的な研究として本研究領域を設定した。研究の成果は、成果報告書、ニューズレター、ホームページ、研究発表会、公開シンポジウム、展示会などを通して速やかかつ頻繁に公表する。

##### (2) 研究の進展状況及び成果の概要

研究の進展状況：総括班と14の研究班は、本研究領域が発足した平成17年度以来、国内・外関連研究を着実に推進し、その成果を、成果報告書、ニューズレター、ホームページ、研究発表会、公開シンポジウム、展示会などを通して積極的に公表してきた。現地調査に関しては、調査許可の獲得が当初の予定を大幅に遅れたにもかかわらず、平成19年の2月から3月に実施した第1次現地調査（遺跡分布調査）がビシュリ山系の遺跡の分布と年代を明らかにし、同年5月には、分布調査の成果を踏まえて発掘対象遺跡に選定したガームネアリ遺跡の平面図を作製した。そして、同年8月には同遺跡で発掘調査を開始する。

成果の概要：ガームネアリ遺跡は前期青銅器時代の年代で、本研究領域の全体課題「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」を推進するための絶好な遺跡である。同遺跡の周辺には、ユーフラテス河氾濫原の都市的村落遺跡群、氾濫原直近河岸丘上の墓地遺構群、河岸段丘直上からビシュリ山まで広がる砂漠大地のケルン群が分布する。これら遺跡・遺構群の担い手は、彼らに共通した部族性をきずなとして、ユーフラテス河氾濫原の都市的村落と部族社会を形成したと考えられる。発掘調査が開始されるいま、物証によりこの仮説を解明しつつある。

#### 5. 審査部会における所見

##### B（一層の努力が必要である）

本研究領域は、ユーフラテス河中流域ビシュリ山系での総合調査により、同地域で部族社会が形成された経緯を解明することを目的として掲げている。従来の考古学的手法だけにとどまらず、自然科学、人文科学の多彩な分野の融合的な連携によって、西アジア社会の新たな歴史像を構築し、西アジアイメージを刷新することをもねらった野心的な構想を持っている。これまでのところ、現地の事情によって発掘許可を取得するのに時間をとられたが、研究の遅れを取り戻すべく、発掘の回数や時間を増やすことで、当初の研究計画を達成する努力を行っている。

ただし、遅れを取り戻すには、なお一層の努力が必要と思われる。また、自然科学、歴史学、考古学などを総合することを標榜しつつも、現状では、伝統的な考古学的手法にまだ比重が置かれていることも今後の改善すべき点であろう。更に、今日の人文・社会科学ではいささか問題含みとなっている「部族」という用語を積極的に用いている以上、概念規定については、より一層厳密な定義づけが不可欠である。